

主 題：ヨハネが天で見た光景
聖書箇所：黙示録 4章1-11節

黙示録4章1節をご覧ください。今日から私たちはこれから何が起こって行くのか？そのことについて見ていきます。特に今日は、ヨハネが天で見た光景について4章のみことばを見ていきます。恐らく、皆さんもいろいろなメディアを通して「臨死体験」のことを聞かれたことがあるでしょう。死んで天国に行ったという、その人たちの体験談です。そこは非常にすばらしい樂園であったとか、空がどうだったとか、自然がどうだったとか、いろいろなことを聞いたり、テレビで見たりすることもあったかと思えます。正直、私は余りそのようなものは信じません。なぜなら、神は私たちに聖書を与えてくださって、この聖書を通して神は私たちに知るべきことを教えてくださっているからです。今日見るところですが、そこでは天がどういうことなのかを少し私たちに示してくれます。恐らく、今日みことばを見た後に皆さんがお気付きになることは、マスコミを通して聞いたことと聖書が教えていることは一致しないということでしょう。もし、私たちが死んでからのこと、天国について知れたければ、体験をした人の話を聞くのではなく、神が与えてくださった聖書にそのことを問いかけることです。一番良い方法は、神のことばである聖書に記されている真理に耳を傾けることです。

ヨハネが体験したこと、ことばで表現することができないほどすばらしいその体験を見ていきます。ヨハネは一生懸命私たちに伝えようとしてくれています。確かに、象徴的な表現もありますが、それらもしっかり学んで、私たちはどのようなところに行こうとしているのか？いったい、そこで何が行われているのか、神の真理をみことばを通して学んでいきたいと思えます。

A. 天に導かれたヨハネ 1節

1. 新しい時代

1節は「その後、」ということばで始まっています。「その後、私は見た。」と。その後に「ここに上れ。この後、…」とあります。この「この後」と「その後」というのはギリシャ語では同じことばが使われています。直訳すれば「これらの後に」ということで複数形が使われています。いろいろな出来事があったが、それらは過ぎ去ってしまった、「これらの後に」というわけです。ヨハネは何のことを言っているのか？ここでヨハネが言わんとしたことは、教会の時代が終わったということです。主イエス・キリストが教会を迎えに来てくださった、教会とは建物ではなく、主イエス・キリストを信じていた、神によって救われていた本当のクリスチャンたちのことです。ペンテコステに始まり空中再臨で終わるという教会の時代に救われたすべての人たち、その人たちを迎えに来るといってその出来事が終わったその後のことです。

なぜ、そのように言い切れるのか？実は、この4章から22章16節まで、あることばが出て来ないからです。私たちは2章、3章でそのことばを何度も見て来ましたが、そこには出て来ません。そのことばは「教会」です。また、「キリストのからだ」という表現もこの中には出て来ません。「ユダヤ人」「異邦人」という表現になっています。

ですから、新しい時代を迎える、新しい時代が始まる、これまでのことは終わって新しいことが始まろうとしていると、そのことをこの1節でヨハネは教えようとするのです。

2. ヨハネが見たもの

1) 天に一つの開いた門があった

「その後、私は見た。見よ。天に一つの開いた門があった。」、ヨハネはまだ地上にいるのです。そして、見上げると、その天ではある一つの門が開いていたというのです。何のために門が開かれていたのか？ヨハネがそこから天に入るためです。この「開いた」という動詞の時制は完了形が使われています。ヨハネが見ているときに門が開いたのではなく、もうすでにこの門は開かれていたのです。ヨハネのために開かれ、ヨハネがそこから入って来るのを待っているかのように、その様子が記されています。そして、ヨハネはこの門を通して天へと導かれるのです。

そして、「天」とは「神が臨在しておられるところ」です。主イエス・キリストが十字架で亡くなって、死後三日目に肉体をもってよみがえられた後、40日この地上でご自分がよみがえられたことを明らかにした後昇天されました。天に帰って行かれたのです。人々がその有様を見ていたことが使徒の働き1章に記されています。イエスはどこに行かれたのか？この「天」です。「第三の天」と言われるところに行かれたのです。第一の天はこの大空、第二の天は星があるところ、主イエスは第三の天に戻られ、ヨハネはそこに招かれたのです。使徒の働き7：55-56にはステパノの記述があります。「:55

しかし、聖霊に満たされていたステパノは、天を見つめ、神の栄光と、神の右に立っておられるイエスとを見て、
:56 こう言った。「見なさい。天が開けて、人の子が神の右に立っておられるのが見えます。」と。

2) かつてヨハネに呼びかけたラッパのような声を聞いた : 主が語られた

続いて「また、先にラッパのような声で私に呼びかけるのが聞こえたあの初めの声があった。」とあります。ヨハネがこのように言ったのは、実は、このような体験をもうすでに彼自身がしているからです。黙示録1:10にそのことが記されていました。「私は、主の日に御霊に感じ、私のうしろにラッパの音のような大きな声を聞いた。」と。旧約聖書の時代において、神がご自分の民に何かを伝えようとするとき、神がご自分の姿を人々に示そうとされるとき、命令が与えられるとき、いつも、ラッパの声をもって人々を集められました。神がメッセージを語る、そのためにです。ですから、ここでヨハネが言わんとしていることは、ヨハネが見上げたときに天に開いた一つの門が見えた。そのときに神が私に語られた。「ここに上れ。この後、必ず起こる事をあなたに示そう。」と、このように神が命じられ、そして、ヨハネは神が臨在しておられる第三の天にまで引き上げられたということです。

B. 天でヨハネが見たもの 2-11節

その後、2節から4章の最後まで、ヨハネが天で見たことが記されています。彼が見たものは、最初に「神の御座」、そして、「御座の周り」の様子、御座から外に出て観察します。そして、御座の前の様子、御座の中央とその周りの様子、そして、御座に着かれたお方を礼拝している様子、これらのことがこの後記されているのです。順に見ていきましょう。

1. 神の御座 : すべてを支配しておられるお方の御座 2、3 a節

1) 御座があり

2節に「たちまち私は御霊に感じた。…」とあり、これも1:10に出て来たことばです。「私は、主の日に御霊に感じ、」と。「御霊に感じ」とは「聖霊なる神の特別な働き」を意味しています。ヨハネがここで言っているのは、聖霊によって特別な経験をしたということです。エゼキエル書3:14にも「霊が私を持ち上げ、私を捕らえたので、私は憤って、苦々しい思いで出て行った。しかし、【主】の御手が強く私の上のしかかっていた。」と書かれています。聖霊に支配されたヨハネは普通では決して経験できない状態、恐らく、恍惚状態に置かれたのでしょう。「恍惚」というと私たちは誤解してしまいます。心奪われてうっとりするとか、頭の動きや意識がはっきりしないなど、辞書はそのように定義するからです。でも、ヨハネは眠っていたのでも、意識がはっきりしていなかったわけでもありません。彼はほとんどの人が経験することのない特別なことを経験するのです。神との直接的な霊的交わりの中に入れられるのです。

少し、皆さんに覚えておいていただきたいことがあります。このような体験をすることはその人の霊性を上げるのではないということです。私たちの危険は、このような特別な体験を求める傾向があります。このようなことを経験するなら自分は特別だとか、こういう体験をするなら自分の信仰は成長するだろうとか、残念ながら、これらのことで信仰は成長しません。信仰の成長は唯一、神のみことばに従うことによってです。でも、神は特別にこのような働きを選ばれた人たちの中に為されました。パウロもその経験をしました。でも、パウロはそのことを自分の経験として口にしませんでした。人間の弱さを知っているからです。そのような経験を求め探っていくような傾向にあるからです。ですから、私たちはそのような経験主義に走って行くではありません。みことばにしっかり立つのです。

でも、ヨハネが私たちに教えることは、私たちだれもが見たことのないことを神はヨハネを通して明らかにされた、そのことです。「…すると見よ。天に一つの御座があり、」と、彼が最初に見たのは「主権者なる神」です。絶対的な主権を持つておられる方、だれ一人この方に逆らうことはできないのです。だれもこの方に不平や不満を言うことができないのです。絶対者がそこにおられるのです。それが神です。神がお造りになった如何なる被造物も、この方に勝る力を持ちません。この方のみこころだけが為されるのです。この方が考えておられるように、この方が導かれるようにすべてのことは進んでいくのです。そのような絶対者なる神、その方をヨハネは見たと言うのです。詩篇103:19には「【主】は天にその王座を堅く立て、その王国はすべてを統べ治める。」と書かれています。すべてのことを治めておられる神がおられると、そのことをまずヨハネは私たちに教えるのです。

2) 「御座についておられるお方」を見た 2, 3節

次に、「…その御座に着いている方があり、:3 その方は、碧玉や赤めのうのように見え、」と、絶対者なる神についての説明がされています。そこにおられる神の御姿をヨハネはこのように二つの宝石をもって表わしています。

・碧玉 = *神の完全な光り輝く聖さを象徴的に表わしている

緑や紅など、いろいろな色があるようです。でも、この碧玉は透明ではありません。ここに出て来る碧玉は私たちが知っている碧玉とは少し違います。というのは、黙示録21:11には「都には神の栄光があった。その輝きは高価な宝石に似ており、透き通った碧玉のようであった。」と書かれています。碧玉は

透き通っているのです。ですから、ある神学者はここに書かれている碧玉という石はダイヤモンドであろうと言います。どうしてそのように違うのか？レオン・モーリスという神学者は「当時は、化学的な専門用語が定まっていなかった。だから、宝石と半宝石との区別がないので、何を意味しているのか非常に分かりにくい。」と言います。ですから私たちは、石の名前にとられるのではなく、それが表わしているのが何かを見なければいけないのです。これがダイヤモンドだとすると大変な輝きをもっています。透き通っていると、神がどのような方かを言っているのです。つまり、神は栄光に満ち溢れたお方であるとともに、すべてにおいて聖いお方であるということです。それが石を象徴として用いて私たちに教えてくれることです。

・赤めのう = *この石が象徴するのは、神のさばき

これはルビーだろうと言われます。「赤めのう」はサーディオンというギリシャ語を使っています。前回学んだ「サルデス」という町の名前はここに由来します。この赤めのうが象徴するには「神のさばき」です。聖い正しい神はすべての人の心をご覧になっています。人間の不信仰、不敬虔に対して神は怒りをもっておられる、そのことを言うのです。私たちはどうも神は愛のお方だから何をしても赦していただけると、そのように願ってそのように信じたいと思っています。でも、聖書を見ると、神は愛のお方ゆえに、また、正しいお方であるゆえに、罪に対して正しいさばきを下されるお方であることを教えています。私たちもそうです。だれかを愛するなら、その人が間違ったときにそれを矯正するのは愛です。だれかが間違ったことをしているのを見て見ぬふりをするのは愛ではありません。

神は愛において完全なお方であって、私たちが間違ったことをしたときには神はそれを懲らしめられます。責められます。私たちが愛しているからです。同時に、神は聖い方であって、どんな小さな罪をも大目に見られることはありません。その罪を正しく、必ずさばかれます。ですから、私たちの中のどこかに植え付けなければならない神のご性質、それは神は聖いゆえに罪に対して怒りをもっておられるということです。罪を憎んでおられます。聖い怒りです。聖い方ゆえにどんな汚れも憎まれるのです。そのような神であることを私たちは忘れてはいけません。なぜなら、この後、黙示録を見ていくと、まさに、その神がこの世界にさばきを下されるからです。聖い神が人の罪に対してさばきを下されるのです。ですから、この二つの石が私たちに教えることは、神は聖い方であり、同時に、それゆえに神はさばきをもたらずということです。

そして、もう一つ、この石が教えることは、神は契約を決して忘れることのないお方だということです。神は約束されたことを絶対に忘れないということです。なぜ、そのように言えるのか？実は、この二つの宝石は、旧約の時代に大祭司が祭壇の前に務めを果たすときに、彼らはある装束を身に着けましたが、そこには12の宝石が散りばめられており、その中の一部だったのです。その様子は出エジプト記28：17-20に書かれています。「:17 その中に、宝石をはめ込み、宝石を四列にする。すなわち、第一列は赤めのう、トパーズ、エメラルド。:18 第二列はトルコ玉、サファイヤ、ダイヤモンド。:19 第三列はヒヤシンス石、めのう、紫水晶。:20 第四列は緑柱石、しまめのう、碧玉。これらを金のわくにはめ込まなければならない。」と。初めが「赤めのう」、最後が「碧玉」です。それをここで指しています。大祭司が神の前に立つとき、彼らはイスラエルの12部族全員を代表しています。12の宝石はヤコブに生まれた12人の子どもたちを象徴しており、最初の「赤めのう」はルベン、最後に生まれた息子ベニヤミンが「碧玉」です。

つまり、神は「わたしはイスラエルに約束したその約束を絶対に忘れない」と言われたのです。そのことが黙示録の中に記されています。神はイスラエルに対してすばらしい救いのみわざを為していかれます。神に逆らい続けた民、しかし、神は契約を結んだゆえに、その契約を決して忘れることがない。そして、神は約束を守られる忠実で真実な神であることが、この黙示録の中に繰り返して記されています。ここでもそのことが言われているのです。「わたしはイスラエルの12の部族を忘れることはない」と。ですから、聖い神であり、罪を警告された神は、同時に、「わたしはわたしが結んだ約束を絶対に忘れない」と言われるのです。そのことが3節の後半に書かれています。

2. 御座の周り 3b、4節

「その御座の回りには、」と、これまでは御座を見ていましたが、光景が御座の回りへと移ります。

1) 緑玉のように見える虹があった

・**緑玉** = これはエメラルドであると言われます。緑色は「神の恵みとあわれみを象徴する」と言いますが、虹が緑玉のように見えると書かれています。私たちが考える虹は七色ですが、それぞれの色の中の主要な色が緑だということです。

・**虹** = 虹は神が人間との間に結ばれた契約のしるしでもありました。創世記9章にそのことが書かれています。9：16「虹が雲の中にあるとき、わたしはそれを見て、神と、すべての生き物、地上のすべて肉なるものとの間の永遠の契約を思い出そう。」と。もう神は洪水をもって二度と人類を滅ぼすことはしない

と、その約束のしるしとして神は虹を造られました。ですから、この3節で、神は聖いゆえにさばきをもたらすけれど、神は契約を覚えておられる。あの虹はわたしと人類との約束だ、わたしはその約束を必ず守る、そのような神だということをヨハネは私たちに教えてくれるのです。

2) 二十四の座があった。白い衣を着て、金の冠を頭にかぶった二十四人の長老たちがすわっていた

いったい、これはだれのことでしょうか？二十四人の長老たちは「教会」、救いに与ったクリスチャンたちの代表です。なぜ、そう言えるのか？幾つか説明します。旧約の時代においてイスラエルの祭司たちは二十四組に分けられました。そのことはI歴代誌24：7-19に書かれています。「：7 第一のくじは、エホヤリブに当たった。第二はエダヤに、：8 第三はハリムに、第四はセオリムに、：9 第五はマルキヤに、第六はミヤミンに、：10 第七はコツに、第八はアビヤに、：11 第九はヨシュアに、第十はシェカヌヤに、：12 第十一はエルヤシブに、第十二はヤキムに、：13 第十三はフパに、第十四はエシェブアブに、：14 第十五はビルガに、第十六はイメルに、：15 第十七はヘジルに、第十八はピツェツに、：16 第十九はベタフヤに、第二十はエヘズケルに、：17 第二十一はヤキンに、第二十二はガムルに、：18 第二十三はデラヤに、第二十四はマアズヤに当たった。：19 これは【主】の宮に入る彼らの奉仕のために登録された者たちで、彼らの先祖アロンがイスラエルの神、【主】の彼に命じられたところによって、定めたとおりである。」、二十四人の代表がいたのです。

***教会(クリスチャン)は、**

・**新約の祭司たち** : 新約の時代に生きている私たちは「王の祭司」とであると言われていています。Iペテロ2：5-9に記されています。「：5 あなたがたも生ける石として、霊の家に築き上げられなさい。そして、聖なる祭司として、イエス・キリストを通して、神に喜ばれる霊のいけにえをささげなさい。：6 なぜなら、聖書にこうあるからです。「見よ。わたしはシオンに、選ばれた石、尊い礎石を置く。彼に信頼する者は、決して失望させられることがない。」：7 したがって、より頼んでいるあなたがたには尊いものですが、より頼んでいない人々にとっては、「家を建てる者たちが捨てた石、それが礎の石となった」のであって、：8 「つまずきの石、妨げの岩」なのです。彼らがつまずくのは、みことばに従わないからですが、またそうなるように定められていたのです。：9 しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。」、クリスチャンであるあなたは「王である祭司」だと。だから、私たちは執り成しをするのです。旧約の祭司たちは人々に代わって神に執り成しをしました。今の私たちも人々のことを神の前に執り成しているのです。祭司だからです。黙示録1：6にもこのように書かれていました。「また、私たちが王国とし、ご自分の父である神のために祭司としてくださった方である。キリストに栄光と力とが、とこしえにあるように。アーメン。」と。

ですから、二十四の座があって二十四人の長老とはまさに旧約聖書に見た祭司たちをそのように分けた姿を思い出すのです。そして、新約の私たちは4節の記述に、救いに与ったクリスチャンたち、教会のことを指しているのを見ます。

・**白い衣を着ている** : 「白い衣」とは、その人たちは罪が聖められて白くされているのです。罪に代わってキリストの義がその人たちのうちに転嫁されたのです。彼らはキリストの義をいただいたのです。だから、「聖い」と宣言されたのです。罪赦された者たちは白い衣を着ています。

この二十四人の長老たちは天使たちではないかと…、そうではありません。天使たちは救いに与ることがないからです。聖められた者たちは私たち救われた者です。

・**金の冠を頭にかぶった** : そして、三つ目に「金の冠を頭にかぶった」とあります。黙示録には「冠」というギリシャ語が二つ出て来ます。元ダラス神学校学長ワルブード師はこのように言っています。「一つのギリシャ語はディアデーマで、このことばの意味は「主権者、支配者」であってその人たちがかぶる冠のことで、それをかぶっている人には「支配する権威が与えられている」ことを明らかにする。もう一つの冠はステファノスで、英語ではスティーブ、スティーブンと言ひ、これは「勝利者の冠」と言われているギリシャの競技会において勝利したときに与えられるものであった。」と。ですから、オリンピックでいただくような冠と思えばいいのです。

しかも、ここには「金」とあります。それはもう彼らは勝利を得たからです。「金の冠」にはそのような意味があるのです。また、このステファノスは忠実であった者たちがいただける冠でもあります。ですから、これは褒美のことです。この人たちはもう神から褒美をいただいているのです。そうすると、この新しい時代、空中再臨があって空中携挙があったその時点で神から褒美をいただいているのはだれですか？限定されていきます。すでに救われていた新約のクリスチャンたち、教会時代のクリスチャンたちです。つまり、私たちのことです。その代表が二十四人でその人たちが座に座っているのです。

3. 御座から 5 a 節

今度は御座から外に何かが為されています。5 a 節「御座からいならずまと声と雷鳴が起こった。」、この出来事は、たとえば、旧約聖書で律法をいただく前にシナイ山で同じことが起こっています。出エジブ

ト19：16「三日目の朝になると、山の上に雷といわずまと密雲があり、角笛の音が非常に高く鳴り響いたので、宿営の中の民はみな震え上がった。」、人々は震え上がっています。「御座からいわずまと声と雷鳴が起こった。」とは「神のさばき」のことです。聖い神は罪を放っておかれません。その罪に対してさばきを下されます。もちろん、契約の神、契約を絶対に忘れない神です。それでも、神は人間の罪に対してさばきを下されるのです。

4. 御座の前 5b—6a節

情景は御座から出て、今度は御座の前に移って行きます。

1) 七つのもしびが御座の前で燃えていた : 神の七つの御霊である

5節の後半に「七つのもしびが御座の前で燃えていた。神の七つの御霊である。」とあります。御座からこのようなことが起こっていたということから、今度は御座の前のことに移っています。御座の前には「七つのもしび」が燃えていたのです。「神の七つの御霊である。」とも書かれています。これも黙示録1章に出て来ます。1：12を見ると「…振り向くと、七つの金の燭台が見えた。」とあります。4：5では「七つのもしび」と書かれています。1：12の「燭台」は屋内のことですが、「もしび」は屋外のことです。そこが異なります。外に置いて明かりを放つものです。しかも、この「もしび」ということばは新約聖書に11回、黙示録にも他に4回出て来ます。8：8、10、19：20、21：8です。その訳は「激しく燃えた」ということです。多少の風では消えない勢いがある燃え盛っている様子です。神のさばきのことです。まさに、神がそのさばきを下そうとされているその様子がここに記されているのです。神はずっと忍耐をもって一人でも多くの罪人が救いに与るようにと、主イエス・キリストによって備えられた救いに与るようにと待って来られました。しかし、その救いを拒み続けた人たち、恵みの神に背を向け続けた人たちに対して、ついに、約束されていたさばきのときが来るのです。

その後「神の七つの御霊である。」とあります。これもすでに見ました。1：4「ヨハネから、アジャにある七つの教会へ。今いまし、昔いまし、後に来られる方から、また、その御座の前におられる七つの御霊から、」、3：1でも「また、サルデスにある教会の御使いに書き送れ。『神の七つの御霊、および七つの星を持つ方がこう言われる。「わたしは、あなたの行いを知っている。あなたは、生きてるとされているが、実は死んでいる。」と見ました。聖霊のことです。1：4では「あいさつ」に聖霊が出て来ました。ところが、4章では「あいさつ」ではなく、神のさばきの中に「聖霊」が出て来ます。聖霊によって、神によってこのさばきをもたらされると。不敬虔な者たちを滅ぼす存在として聖霊がここに記されています。ヘブル12：29には「私たちの神は焼き尽くす火です。」とあります。神は火をもって罪をさばかれるのです。

ですから、さばきの警告がここに再び記されているのです。

2) 水晶に似たガラスの海のようにであった

そして、もう一つ御座の前の様子が6節の初めに書かれています。「御座の前は、水晶に似たガラスの海のようにであった。」と。この御座が座するところは水晶のように透き通ったガラスのようであったと言います。天国に海はありません。ここで言っていることはまさに状況が海のように広く広がっている様子を表わしています。ヨハネは今まで見たことのない光景をこのように証しているのです。神の御座の前は光り輝いていると言うのです。レオン・モーリスはある人の引用を用いてこのように説明しています。「海は神のことばでは言い表わせない絶対的な聖さである。私たちはだれもこのままでは神に近づくことはできない。輝く海はあらゆるものが近づくことを禁じている。つまり、水晶に似たガラスの海というのは、再び、ここで神の完璧な聖さを表わしている。だれ一人としてこの方の前に近づくことはできない。それほど神は聖いお方である。」と。

ヨハネは当然、これを見て、大変な畏敬の念を抱いたはずで。聖書の中に神のあわれみによって神を見た人たちがいます。たとえば、イザヤです。その人たちに共通していることは「神の前で人間は畏れて震え上がる」のです。そのようにみことばは教えているし、そして、この後私たちは確かに、神によって造られた者たちがそのような態度をもって神を崇めている様子を見ていきます。この方は神です。余りにも聖くて私たちのように罪深い者は近づくことはできません。そのような存在だとヨハネはここで改めて知らせるのです。

5. 御座の中央と回り 6b—8a節

6b節から「御座の中央と御座の回りに、前もうしろも目で満ちた四つの生き物がいた。：7 第一の生き物は、獅子のようであり、第二の生き物は雄牛のようであり、第三の生き物は人間のような顔を持ち、第四の生き物は空飛ぶ鷲のようであった。」、非常に理解が難しい箇所に出会いました。まず、この「生き物」とは「天使」のことです。実は、エゼキエル書1：5—6にはここに出て来る「生き物」と非常によく似た「生き物」が記されています。「：5 その中に何か四つの生きもののようなものが現れ、その姿はこうであった。彼らは何か人間のような姿をしていた。：6 彼らはおのおの四つの顔を持ち、四つの翼を持っていた。」、黙示録では、この「生き物」は「獅子」「雄牛」「人間のような顔」「鷲」と書かれています。エゼキエル1：10、

15, 18にも類似した表現があります。「:10 彼らの顔かたちは、人間の顔であり、四つとも、右側に獅子の顔があり、四つとも、左側に牛の顔があり、四つとも、うしろに鷲の顔があった。」「:15 私が生きものを見ると、地の上のそれら四つの生きものそばに、それぞれ一つずつの輪があった。」「:18 その輪のわくは高く、恐ろしく、その四つの輪のわくの回りには目がいっぱいついていて、」

では、このエゼキエル書に記されている「生き物」とは何か？エゼキエル自身が教えています。エゼキエル10:20には「彼らは、かつて私がケバル川のほとりで、イスラエルの神の下に見た生きものであった。私は彼らがケルビムであることを知った。」と書かれています。神に仕える天使、ケルビムであると。このケルビムとは神の聖さを守るものです。憶えておられますか？契約の箱があってその上に贖いのふたがありました。その両側に二つの金のケルビムを作るようにと命じられています。確かに、ケルビムのようなのですが、違う点もあります。黙示録には4:8に「この四つの生き物には、それぞれ六つの翼があり、…」と書かれています。エゼキエル書に書かれているケルビムは「四つの翼」です。だから、本当にケルビムなのか？と思いたしますが、確かに、六つの翼を持った天使も聖書には出て来ます。それは「セラフィム」です。イザヤ6:2に書かれているセラフィムです。「セラフィムがその上に立っていた。彼らはそれぞれ六つの翼があり、おのおのその二つで顔をおおい、二つで両足をおおい、二つで飛んでおり、」、出エジプト25:20には「ケルビムは翼を上の方に伸べ広げ、その翼で『贖いのふた』をおおうようにする。互いに向かい合って、ケルビムの顔が『贖いのふた』に向かうようにしなければならない。」とあります。

結論を言えば、よく分かりません。ただ、その天使が存在したことは明らかです。天使の特徴を見ていきましょう。6節と8節に「前もうしろも目で満ちた」とあります。これは神が全知であるのと同じように天使も全知であるというわけではありません。彼らは油断なく行動し、そして、大変な理解力をもっていると、そういう意味です。そして、彼らは四つの被造物に類似していると書かれています(7節)。これらの生き物である天使が象徴していることは何でしょう？この箇所が教えていることは何か？それは、創造された自然界と天使の関係を表わしているのです。

- (1) 獅子のようであり : 野獣の代表です。
- (2) 雄牛のようであり : 家畜を代表するものです。
- (3) 人間のような顔をもち : 人間のこと、すべての被造物で最も優れた存在です。
- (4) 空飛ぶ鷲のようであった : 鳥類を代表します。

つまり、ここで言わんとしていることは、天使たちが何をしているか？何を意味するのか？ということです。自然界のすべてが、神によって造られた全被造物が彼らによって代表されたのです。

ですから、この後見る彼らの礼拝は、天使たちがというよりも、神によって造られた被造物が礼拝をささげていると見るのです。彼らは何をしているのか？

6. 御座に着かれたお方への礼拝 8b-11節

1) 四つの生き物による礼拝 8b節

8b節「…彼らは、昼も夜も絶え間なく叫び続けた。「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、万物の支配者、昔いまし、今いまし、後に来られる方。」と、彼らは三つのことをもって神を称えています。彼らはその目によって大変な知識があり、神がすべてのものを造られた神であり、称賛に値するお方であるということを知っています。

・神の聖さを称えている : 「聖なるかな、聖なるかな、聖なるかな。神であられる主、」、彼らは絶え間なく神の聖さを称え続けています。ちょうど、イザヤ書6章に書かれていたように。この「聖さ」は「分離」を表わしています。他のどんなものとも区別されるお方です。こんなに聖いお方は他に存在しない。聖さにおいて類がない、どのようなものとも比較することのできないすべてにおいて完全に聖いお方であると、その方を称えるのです。

・神の全能さを称えている : 「万物の支配者、」、このことばは「すべての」と「権利を持つ」という二つのギリシャ語が合成されています。そこから、「全権をもつ、全能者」という意味があり、最も力のある存在ということです。どのようなものによっても決して敗北を味わうことのない方、どんな敵にも勝利できる方です。そのことを彼らは賛美するのです。

・神の永遠性を称えている : 「昔いまし、今いまし、後に来られる方。」と、この神の永遠性を称えています。永遠に存在され、永遠に変わることはないお方です。

これらを被造物が称えているのです。創造された被造物が造ってくださった神を「あなたは最も聖い方であり、あなたはどんなことでもできる方であり、そして、あなたは永遠から永遠に存在されるお方だ。」と称えるのです。

2) 二十四人の長老たちによる礼拝 9-11節

9節をご覧ください。「また、これらの生き物が、永遠に生きておられる、御座に着いている方に、栄光、誉れ、感謝をささげるとき、」と、被造物が神に賛美をささげているときに、礼拝をささげているときに何が

起こるのか？ 10節「二十四人の長老は御座に着いている方の御前にひれ伏して、永遠に生きておられる方を拝み、自分の冠を御座の前に投げ出して言った。」、今度は救われた者たちがその賛美に加わって来るのです。被造物だけの合唱であったのが、救われた者たちがそこに加わって大合唱が起こって行くのです。

◎彼らは、

・御前にひれ伏し拝み : 神がどのようなお方であるのかを知ったときに、これは当然の応答です。神を畏れるゆえに、彼らは心からこのような行為を行うのです。私たち信仰者に必要なことはこのような神への畏敬の念かもしれません。なぜなら、心が正しいなら神が喜ばれる正しい礼拝が生まれて来るからです。この様子を見ると、この救われた者の代表たちはこのように神の前にひれ伏して神を拝むと言うのです。心からなる賛美をささげている様子です。このことは黙示録に6回出て来ます。この箇所他に、5:8, 14, 7:11, 11:16, 19:4です。

5:8 彼が巻き物を受け取ったとき、四つの生き物と二十四人の長老は、…小羊の前にひれ伏した。」

5:14 また、四つの生き物はアーメンと言ひ、長老たちはひれ伏して拝んだ。

7:11 御使いたちはみな、…彼らも御座の前にひれ伏し、神を拝して、

11:16 それから、神の御前で自分たちの座に着いている二十四人の長老たちも、地にひれ伏し、神を礼拝して、

19:4 すると、二十四人の長老と四つの生き物はひれ伏し、御座についておられる神を拝んで、

・自分の冠を御座の前に投げ出す : 先に見たようにこの「冠」は、自分たちが神からいただいた報いでした。彼らはそれを自慢し合っていません。地上においてどのようなことをして来たのかという自慢などしていません。彼らはそれらをすべて神の前に投げ出しているのです。彼らが言うことは「神さま、あなたに忠実に従って来たのは実はあなたのみわざです。あなたに仕えることができたのもすべてあなたの恵みです。」と、救われた者たちはこの恵みの神を誉め称えるのです。神からの褒美をいただいた者たちはわかっているのです。そのような歩みができたのはすべて神の恵みであると。彼らの焦点はすべて神に向いているのです。この礼拝の様子を見た時、だれも横を見ていません。みな神を見ています。そして、心からの賛美をもって神を崇めているのです。

彼らはこう言います。11節「主よ。われらの神よ。あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。」、「ふさわしい」ということばが実は11節の最初に出て来ます。この形容詞から11節は始まります。これは「ふさわしい」という意味だけでなく「価値がある、当然です」という意味です。みな、分かっているのです。「神さま、あなたはすべての被造物から称賛を受けるにふさわしいお方です。あなたはその価値があるお方です。」と。「あなたは、栄光と誉れと力とを受けるにふさわしい方です。」とありますが、9節では「…栄光、誉れ、感謝をささげるとき、」と見ました。11節では「感謝」が「力」に置き換わっています。

それはその後理由が書かれています。「あなたは万物を創造し、あなたのみこころゆえに、万物は存在し、また創造されたのですから。」と。創造のみわざをここで改めて述べています。「神さま、あなたは威厳に満ちた方であり、永遠に存在されるお方であり、そして、その御力によってすべてのものをお造りになった。それゆえに、被造物は創造主なる神の栄光を現わし、創造主なる神の栄光を称えています。私たち救われた者もその賛美に加わって、主よ、あなたは何とすばらしいお方でしょう。あなたに勝るものは存在していません。あなただけが神です。あなただけが誉め称えられるに値するお方です。」と、そしてこの賛美の輪が広がって行くのです。

これらの光景を私たちに記してくれたヨハネ、彼はどんな賛美の声を聞いたのでしょうか？被造物が、救われた者たちの代表が、一番大きな声をもってこの偉大な神を誉め称えていると。信仰者の皆さん、あなたもその中にいるのです。あなたも私もその群れの中にいるのです。これは一部の限られた人たちのことではありません。私たちは天にいったときにこうして神を称えるのです。これが約束されていることです。そして、そのようにして私たちは永遠を神とともに過ごすのです。自然界がずっと私たちに神の美しさを、すばらしさを示し続けているように、私たちもこの神のすばらしさを誉め称えながら、神とともに永遠を過ごすのです。

詩篇103:22ではこのように言っています。「【主】をほめたたえよ。すべて造られたものたちよ。主の治められるすべての所で。わがたましいよ。【主】をほめたたえよ。」、私たちはこのことを主のもとに引き挙げられるときに行うのです。でも、皆さん、今私たちはそのことをするのです。この地上にあって。私たちはこのすばらしい神を誉め称えながら今日を生きていくのです。後に、被造物と救われた私たちが声を一つにして神を称えるのですが、今、この地上にあってその働きをしながら、神を誉め称えながら与えられたこの日を生きるのです。神はそれに値するお方です。その価値を私たちは知っています。なぜなら、この神はすべてを造り、あなたを造り、逆らっていたあなたをその罪から救い出してくださった神だからです。神を心から誉め称えながら生きる、それが私たちにできる感謝の生き方だと思いませんか？そのように生きていきなさい！と。実践しましょう。

《考えましょう》

1. 1節の「これらの後に」とはどういう意味ですか？
2. 「二十四の座があった。白い衣を着て、金の冠を頭にかぶった二十四人の長老たちがすわっていた」の説明をしてください。
3. 5節の「そこから、いなずまと声と雷鳴が起こった」の意味を説明してください。
4. どうして神は人の罪に対して怒っておられるのでしょうか？その理由を説明してください。